

2018年

6月10日

第315号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木644番地1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

福祉文化土壌を守る

園長 児嶋 草次郎

梅雨期でうっとうしい日が続きますが、今のところ子供たちはそれぞれ元気に登下校しています。園内のアジサイはずいぶん増えて、約10種類、悪天候の下でそれぞれ存在価値をアピールするように明るく咲いてくれています。

しかし、子供たちの生活がこれから夏に向けてこのまま順調に流れていくわけではありません。梅雨期後半から7月中旬にかけて、徐々にストレスがたまったり、生活がルーズになっていたり、なれ合い関係が生じたりして、マイナス思考におちいって生活の後退する児も出て来ます。

園庭のあちこちの色とりどりのアジサイが、雨に打たれながらもけなげに頭をしっかりと上げて雲に隠れる太陽に向かって咲く姿が、子供たちにプラス思考を喚起させるサインになればと願って増やして来たのです。今年もアジサイを見てインスピレーションを働かして、“自戒自規”でこの雨季を乗り越えてくれればと祈っています。

さて、この原稿は、岡山から博多に向かう新幹線の中で書いています。6月7日（木）午後、岡山市内の山陽新聞社ホールで山陽放送学術文化財団主催による「三千人の孤児、父となった男石井十次」と題するシンポジウムが開催され、私もその講師の一人として招いていただいたのです。

まず岡山映像ライブラリーセンターの小松原貢氏が、当時石井十次の作った映像を一部カラー化して会場の皆さんに紹介（もともとは石井記念友愛社から提供）して下さり、次に石井十次研究の第一人者菊池義昭先生（東日本国際大学教授）が「石井十次の岡山孤児院での福祉実践から何を学ぶか」という題で学術的に話されました。そして、私は福祉現場の人間として、「石井十次の福祉実践を現代の福祉・教育に生かす」という題で話させていただきました。

石井十次の末裔として、また石井十次の名前を掲げて仕事をさせていただき、その顕彰に責任を持つものとして、ありがたい行事でした。今回は、感謝の気持ちをこめながらそのことを書かせていただきます。

石井十次が院内の子供たちの生活の様子を写した活動写真を、「日本最古のドキュメンタリー映画」と小松原氏は位置づけて下さいました。この映像を撮ったカメラ（エジソン社製）は、現在も石井十次資料館に保存されています。この映像については、今後石井十次資料館でも来館者に見ていただくなどもっと活用したいと思います。小松原氏からは、事前打ち合わせの雑談の時、セルロイド製の当時のフィルムの保存方法についても教えていただきましたので、帰ってさっそく実行したいと思います。

菊池先生は、もう 30 年以上、毎年石井十次資料館に来て資料の整理をしながら研究を続けて来られた方で、その論文から学ぶことは多くあります。先生の編集による『石井十次資料館研究紀要』も昨年 18 号を出版しました。先生は時代を追いながら石井十次、および岡山孤児院の実践を紹介され、最後に「100 年先を見越した実践であった」と結ばれました。

また菊池先生は、「研究者は疑い深い。石井十次の実践が事実（本物）であったのかどうかは育った子供たちの話を聞いて確かめるしかない。利用者が証言すれば事実（本物）である」とも話され、岡山孤児院の卒院生である一人の古老（茶臼原在住）の話を紹介されました。まさに実証的です。

研究者の中には、研究を重ねる中で知識が増えていくに従って、いつの間にか自分が実践の専門家になったように思い込んでしまい、現場批判を始める人もいますが、菊池先生は現場にいた経験があるということもあり、その論調に節度があり尊敬できる研究者の一人です。

次に私の話です。まず「はじめに」ということで、次の 4 点をあげさせていただきました。

- ①福祉の世界では、実践とは生活である。
- ②生活は、その時代の生活文化という土壌で育ち、営まれていく。
- ③研究者と実践者との違い。研究者は、調べてその事実に向かい、実践者は、その時代の生活文化の中で、新たに試み育てよう（実践）とする。（研究者が実践するわけではない）。
- ④今、社会的養護・養育の世界では、研究者による革命が起こされようとしている。

実は、この日、私がアピールしたかったのはこの 4 点であり、他は菊池先生におまかせしようという気分でした。

なぜかこのシンポジウムは岡山日蘭協会との共催であり、その資料の中に、シーボルトの娘おいねを日本最初の女医と紹介する箇所があり、私はその話を持ち出して次のように話し始めました。

シーボルトの娘おいねさんは日本で最初の女医さんということですが、当時の蘭学である医学は、言わば科学です。科学は日進月歩であり、当時の医学は歴史的には価値あるものかもしれないけど、もう現代には通用しない。おいねさんの医学を現代に生かそうなんて発想は湧いて来ない。一方石井十次の福祉実践とは生活であり、実際に子供が育ち社会に自立している。それは石井十次一人の活動ではなく、一つの生活文化として定着し育っている。絶滅危惧種かもしれないけど、一つの日本の福祉文化として息づいている。

④の“革命”についてはあの場では具体的に話しませんでしたので、ここに説明しておきます。欧米との児童福祉の文化的基盤の違いに苛立っている科学系の研究者や政治家たちが、早く世界標準にしようと、強引にアメリカンメソッドみたいなものを持ち込もうとしているということなのです。どうもそれを進歩・発展だと思いついでいるようです。私は、日本の生活文化の否定につながり、大混乱がおきると予想しているのですが一。

次に話の順番としては、4つに組み立てました。

- 1、石井十次を生んだ宮崎・高鍋藩の（福祉）文化
- 2、石井十次の福祉実践を発展させた岡山を中心とした人々等との出会いと支援の和・輪づくり
- 3、石井十次と職員たち、そして子供たちの育てた福祉文化
- 4、石井十次の福祉文化を“引き継ぐ”石井記念友愛社の実践

1はいつもの話です。石井十次は突然変異的に出て来たのではなく、宮崎・高鍋藩の福祉文化が生み育てた、つまり文化が文化を生むという話です。秋月種茂時代の「高鍋藩土規」や「明倫堂」の話から始めました。石井十次は幕末の1865年に生まれたのですが、その生まれと育ちについては、「石井十次青春物語」を使って説明しました。明倫堂文化が彼の人格の基礎を作っていたのです。

時代の大きな節目の中で、様々の挫折を体験するのですが、両親の先手を打った教育によって立ち直っていきます。私は「挫折からの3原則」として整理しています。①親（それに代わる人）の愛情。②志教育。③出会いの準備です。これは親（教育者）側の心得として現代でも通用することです。

それでは石井十次はそれからどう脱皮したのか。私がいつも示すのが、17歳医学生になった当時、日誌に書き記した「自戒自規」です。思春期の壁を乗り越えることが人生最大の課題。彼は自分の日誌に自分への戒めと規則を書き並べそれを守ろうとすることで、自分をコントロール（自律）することを習慣化しようとしたのです。「謙讓以て驕傲（きょうごう）に克つ可し」「含忍（がんにん）以て忿怒（ふんど）に克つ可し」、「色欲を絶ちて以て色迷に克つ可し」、「仁愛以て

嫉妬に克つ可し」等々、これらは現代の若者も模範とすべき戒めです。

私はこれらの「自戒自規」は、石井十次の独創ではなく、先人たちの知恵の結集としてとらえています。七転び八起きの少年時代に失敗から学んだ知恵が、彼の人格の基盤を作ったのです。そしてやがて、19歳でキリスト教に入信し、彼の精神世界は地球的に広がっていきます。

2の「石井十次の福祉実践を発展させた岡山を中心とした人々等との出会いと支援の和・輪づくり」は、今回の新しいテーマとも言えます。

同志社の熊本バンドの一人でもあった岡山基督教会初代牧師金森通倫（みちとも）から受洗して以降、炭谷小梅、ペテー等多くのキリスト教関係者との出会いがあり、支援の和・輪が広がっていくのです。この「和・輪づくり」は福祉現場では重要な課題であり、成功するか否かでその発展は決まります。

今回の講演を準備するにあたって、支援者と思われる人々の写真を色々と調べて見たのですが、特に大原孫三郎氏と出会う（明治32年11月）前に支援してくださった方々の中で、例えば武田五郎兵衛氏、増田彦三郎氏、また高梁の福西しげ子氏等の顔を特定することができませんでした。今まで知ろうとしなかったことを申し訳なく思い、このシンポジウムの際、関係者に「分かったら教えてほしい」と投げかけておきました。

大原氏との関係において、忘れてならないのが次の言葉でしょう。「君と僕とは炭素と酸素、あえばいつでも焰となる」。明治44年10月10日の日記に書き記しています。「之れ十数年前より僕等二人が会談する毎にいつも感ずる所の精神的事実」とも書いています。こんな友情は、今の時代にはあり得ないことです。

支援の輪づくりにおいて、「賛助員」（後援会員）募集と「岡山孤児院新報」（機関紙）の発行はなくてはならないものでした。少年音楽隊が全国展開し演奏活動する中で賛助員も募集し、またそれらの人々をつなぎ止めるものとして「新報」を発送し続けるという地道な活動を通し、多くの支援（お金）が集まっていったのです。私も真似をし、後援会「石井十次の会」を作り、「通信」も発行したりしていますが、その10分の1にも手が届かないレベルで、天と地ほどその規模が違います。現代の社会福祉法人は国からの支援を受けて経済的には成り立っているわけですが、その和・輪づくりは、本質的にやるべき作業であると私は考えています。

この和・輪づくりにおいて、大活躍したのが院の子供たちであるし職員たちです。1200人の子供たちがいた頃には、100人ほどの職員たちがいました。その中に今回新たな写真を1枚加えさせていただきました。前回の「友愛通信」でも紹介しました石井十次家族と5人の孤児が一緒に写っている1枚です。

石井十次の妻品子が亡くなった時、長女の友は5歳、次女の震子は3歳、三女の基和子は6か月でした。それから9年ほどの年月がたち、この写真は明治37年頃の写真。友が14歳、震子が12歳、基和子が9歳に成長しています。私は彼女たちの成長の道筋をイメージしながら涙を流しました。孤児たちと写真におさまると言うことは、彼女たち3人も支援の和・輪づくりのメンバーであったということになります。その後、基和子が16歳で亡くなり、友は山陽女学校、日本女子大学と進んだ後、すぐ画家児島虎次郎と結婚。私は友の孫になりますが、よくぞ親を恨むことなく成長してくれたものだと、感謝の気持ちが湧いて来たのです。

だいたいこのあたりで与えられた50分を越えてしまい、あとは、全速力でパワーポイントを先送りしてもらい、「石井記念友愛社の実践」の中で、2点だけ紹介させていただきました。

一つは、福祉文化の伝承は福祉文化財+研究+人の和・輪づくりでなされていくということ。その結果として、現在、石井記念友愛園が12名の大学進学者を出しているということです。

新幹線は、曇り空の下、街も山も海も突き抜けながら、時のように走って行きました。刻々と時は過ぎ去り、子供たちは次々に成長していきます。

最後に、4月に吉田松陰の「松下村塾」を訪ねた時の、園の高校生たちの感想文の一部を紹介させていただきます。その文章が福祉文化の伝承を感じさせてくれるからです。

「自分自身を見つめ、運命を変えると聞いた友愛園の教えを再認識し、改めて友愛園での生活に誇りを持つことができた。吉田松陰やその門下生たちがまっすぐに目標に進んでいったように、私も自分の可能性を信じ、目標へまっすぐに進み、さらに運命を変えていきたいと思う。」

高2 ゆうか

「塾則にもあったように、親や私を支えてくれている祖父母に感謝を忘れずに生活していきたいです。」

高1 れいな